

## スロー・モビリティ

藤井 聡

東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻

Assistant Professor, Dept. of Civil Engineering, Tokyo Institute of Technology

世間一般では「交通」という言葉は、どうしても“マイナー”な印象が付きまとうようである。例えば数年前にゴールデンタイムに放送されていた、とある民放の「交通バラエティ・日本の歩き方」という番組があった。この番組は「交通」をおもしろおかしく取り扱うバラエティ番組であったが、「交通」という言葉が目立たないように入念に配慮されているようであった。司会者は交通という言葉をはほとんど発言せず、番組のロゴでも「交通」という言葉は「日本の歩き方」という大きな文字に圧倒されつつ、申し訳程度に小さく記載されているに過ぎなかった。おそらくは、一般公衆の感覚に敏感な放送作家が「交通」という言葉が持つある種のマイナー感を払拭すべく腐心した結果、このような形で番組が構成されたのであろう。

また、社会問題を論ずる際にも、「交通問題」にはある種のマイナー感が付きまとう。新聞やテレビにおいて、環境問題や防衛問題や防災問題、あるいは政治や文化の問題が語られるときのようなある種の“熱”は交通問題を語る際には概して感じられない。

こうした風潮の背後には、「交通とは、特定の活動を実行するために致し方なく実行するものである」という一般的認識があるように思われる。つまり、交通そのものは意味も価値もなく、時間を浪費させ、体力を消耗させる派生需要にしか過ぎないという認識である。

しかし、本当に交通は無価値な代物なのであろうか。

この問題は、日常の中で「食」をどのように位置づけるか、という問題と重なる部分が多い。「交通は無価値な手段にしか過ぎない」という主張は、「食は無価値な手段にしか過ぎない」という主張と類似しているように思える。しかし言うまでもなく、古今東西を問わず、食は日常における最大の娯楽の一つであり続けている。食を単なるエネルギー採取行為と位置づけ、朝昼晩の全てを“ファースト・フード”ばかりに頼りきる生活が味気ないものであることは、誰しもが同意するところであろう。同様に、「交通は無価値なり」と見なす風潮は、少しずつ我々の生活を味気ないものにしているのではなかろうか。

我々が、今よりももう少し、ゆっくりと移動することができたら――。

今までは気がつかなかった花の香りや虫の声を感知ながら身近な自然とふれあうことも、今までは知らなかった地域の人々と挨拶することもあるかもしれない。今まで行きもしなかった美味

しいレストランや、感じのいい公園や小径を発見できるかもしれない。そうであるのなら、人々が交通を日常生活の中の価値ある一コマと捉え、ゆっくりとした移動、いわば“スロー・モビリティ”を志向する社会では、地域コミュニティの衰退も、中心市街地の衰退も、地産地消経済の衰退も、少しずつ解消に向かうことも十分に考えられる。そして、交通事故も渋滞も環境問題も、大きく改善することも期待できることとなろう。

言うまでもなく、交通問題の原因は多種多様である。しかし、このように考えてみれば、「交通を単なる無価値な手段と位置づけ、交通問題を効率化と円滑化の問題としてのみ捉える」という、我々、交通専門家側の矮小化した認識そのものが、交通問題の解消を妨げる本質的原因の一つとして厳然と存在していたのではないか——、そう思えてくるのではなからうか。